

令和2年度
発生予察情報

特殊報第2号

令和2年8月24日
埼玉県病虫害防除所
(TEL:048-539-0661)

ツマジロクサヨトウの発生について

県北部地域に設置した性フェロモントラップにおいて、本種と疑われる成虫が捕獲された。横浜植物防疫所に同定を依頼した結果、県内未発生のツマジロクサヨトウであると確認された。

* 特殊報：新規の有害動植物を発見した場合及び重要な有害動植物の発消長に特異な現象が認められた場合に発表するものです。

1 害虫名 ツマジロクサヨトウ (*Spodoptera frugiperda*)

2 対象作物 飼料用トウモロコシ、スイートコーン、ソルガムなど

3 発生経過

- (1) 令和2年8月、侵入警戒調査のために県北部地域に設置した性フェロモントラップにおいて、本種と疑われる成虫が捕獲された。
- (2) 農林水産省横浜植物防疫所に同定を依頼したところ、本県で未発生のツマジロクサヨトウと同定された。県内の農作物における本種幼虫の発生及び被害は認められていない。
- (3) 令和元年の国内の発生状況は、7月に鹿児島県の飼料用トウモロコシほ場で初発生を確認後、21府県で発生が確認された。令和2年は、8月24日時点で、31県で発生が確認されている。

4 本種の特徴及び生態

- (1) 成虫は開帳約37mm、雌雄で外観が大きく異なり、雄のみが前翅に淡色斑と白斑を持つ(図1)。
- (2) 終齢幼虫は体長約40mmで、頭部の複眼と前額の境界にみられる逆Y字状の模様および尾部の黒色斑点が特徴である(図2)。卵は寄主植物に塊状に産み付けられ、雌の体毛で覆われる。
- (3) 本種は南北アメリカ大陸の熱帯～亜熱帯原産で、暖地に適応した種であり、熱帯では年4～6世代発生する。原産地の南北アメリカでは、毎年夏季に成虫が移動・分散するが、暖地を除く地域では越冬することができない。
- (4) 本種は、アブラナ科(カブ等)、イネ科(トウモロコシ、イネ、サトウキビ等)、ウリ科(キュウリ等)、キク科(キク等)、ナス科(トマト、ナス等)、

ナデシコ科（カーネーション）、ヒルガオ科（サツマイモ）、マメ科（ダイズ等）など80種類以上の作物を加害することが報告されている。

国内では、飼料用トウモロコシをはじめ、スイートコーン、ソルガム等のイネ科作物での発生が確認されている。

5 被害の特徴

(1) 幼虫が植物の葉、茎、花および果実を食害する。若齢幼虫は葉を裏側から集団で加害し、成長すると加害しながら分散する。摂食量が多く、食害部には多量の糞が散在する。

6 防除対策

(1) 多発すると被害が拡大する恐れがあるため、ほ場をよく見回り、幼虫の早期発見に努める。

(2) 本虫の疑いがある幼虫を発見した場合には、速やかに埼玉県病害虫防除所まで連絡する。

(3) 県では、植物防疫法第29条第1項の規定に基づき、本虫の防除を行うこととする。については、本虫を防除する場合には、ハスモンヨトウやメイチュウ類等に適用のある農薬を使用して防除を行うことが可能である。

本種に対して使用できる農薬については、以下の農林水産省ホームページを参照する。

※農林水産省「ツマジロクサヨトウの薬剤防除に使用できる農薬一覧」

https://www.maff.go.jp/j/syouan/syokubo/keneki/k_kokunai/tumajiro.html

(4) 発生が確認されたほ場では、幼虫の分散及び土壌中の蛹の残存を防ぐため、早期収穫に努めるとともに、収穫後は直ちに耕耘する。



図1 ツマジロクサヨトウの雄成虫（左）と雌成虫（右）



図2 ツマジロクサヨトウ老齢幼虫（左：外観、中央：頭部正面、右：腹部後方）

※図1、図2は農林水産省「ツマジロクサヨトウ防除マニュアル本編（第1版）」より抜粋